

## 歌舞伎と深川⑥

## 歌舞伎の舞台・深川～四世南北と黙阿弥～

江東区深川江戸資料館



「東海道四谷怪談」(砂村隠亡堀の場) 豊原国周画  
明治17年(1884) 江戸東京博物館蔵

初代並木五瓶が手掛けた「深川物」は、文化文政年間(1804～1830)の江戸歌舞伎の爛熟期に四世鶴屋南北、さらに江戸末期から明治への時代の大きな転換期に活躍した河竹黙阿弥をはじめとした狂言作者たちにより、当時の江戸庶民の生き様を江戸言葉でリアルに描く生世話物として完成しました。

今回は多くの歌舞伎の舞台となった深川を、四世南北と黙阿弥の足跡と、その代表作から見ていきます。

## 1. 深川に住み、没した四世南北

### (1) 四世南北と深川

四世南北(宝暦5年<1755>～文政12年<1829>)は紺屋の型付け職人の子として、中村座と市村座に隣接する日本橋乗物町に生まれました。芝居好きだった南北は家業を捨て、21歳で狂言作者を志し、江戸の世話物を確立した初代桜田治助の門下となります。

四世南北は文化8年(1811)以降、亀戸天神社近くに住まいを移し、その後門前仲町の黒船稲荷(牡丹1-12-9)境内に住み、没しました。息子であり、舞台演出をはじめ父を支えた狂言作者・二世勝俣蔵

(直江重兵衛)は深川の一の鳥居近く(門前仲町交差点付近)で妓楼を営み、孫である五世南北(孫太郎南北)も狂言作者となります。現在も深川には、これら南北ゆかりの史跡と親族の墓が残ります。

### (2) 生世話物の傑作「東海道四谷怪談」

四世南北71歳の時の代表作「東海道四谷怪談」は文政8年(1825)7月、中村座初演。木場に住んだ七代目市川團十郎が伊右衛門、三代目尾上菊五郎のお岩など当時を代表する役者が演じ、48日間の大入りとなりました。この狂言は深川を舞台にその風景や、そこに生きる江戸の下層庶民たちの生き様を描き、生世話物の傑作と言われます。四世南北は生世話物を深川で完成させたとも言えます。

四世南北は「東海道四谷怪談」の中で、特に重要な劇的な場面である「砂村隠亡堀の場」、「深川三角屋敷の場」を深川を舞台に描いています。砂村隠亡堀(岩井橋周辺)は当時、焼場と阿弥陀堂があり江戸郊外の人気のない寂しい場所だったため、怪談にふさわしい場として南北が取り上げたと思われます。さらにこの場面は、男女が戸板にくくり付けられて神



田川に流された事件、また砂村隠亡堀に流れ着いた心中者の話など当時評判だった実話を元に描いています。これらの話を南北はアレンジし、戸板にくくり付けられたお岩と小仏小平が隠亡堀に流れつき、伊右衛門と対面する場面として描きました。カラクリを用いた最大の見せ場である「戸板返し」の演出は、四世南北の息子である二世勝俵蔵の考案と言われます。

また「深川三角屋敷」(深川1-5)は、元禄14年(1701)本所上水請負人・吉右衛門の屋敷として実在した場所で、お岩の妹であるお袖が直助に殺害される場として登場します。当時の狂言は複数の狂言作者たちが場ごとに分担して書きましたが、この場は立作者であった四世南北自ら執筆し、南北が最も力を入れた場面です。南北が得意とした怪談のケレン(奇抜な演出)でなく、時代を超えた人間の普遍的な感情を丁寧に描きました。「深川三角屋敷の場」は、それまでの様式的な歌舞伎の台本を超えて、近代的な演劇の脚本にまでつながる人間感情をリアルに描く重要な要素を生み出しました。

## 2. 河竹黙阿弥～江戸から明治へ～

### (1)「江戸演劇の大問屋」黙阿弥

黙阿弥(文化13年<1816>～明治26年<1893>)は江戸の中心部である日本橋通二丁目の商家に生まれました。芝居好きの黙阿弥は家業を捨て、踊りの師匠の紹介で五世南北の弟子となり、四世南北のノウハウをその孫である五世南北から継承しました。

黙阿弥は取材の範囲が広く、落語、講談、小説、事件をはじめ当時の世相などのあらゆるものから観客、役者のニーズをつかみ、時代を象徴する狂言を作り上げました。黙阿弥はその幅広さから「江戸演劇の大問屋」と言われます。その足跡は狂言作者として江戸歌舞伎を集大成し、明治の近代劇を創造する劇作家としての歩みといえます。



深川三角屋敷跡(深川1-5)

### (2) 深川情緒を伝える「梅雨小袖昔八丈」

黙阿弥の生世話物の代表作である「梅雨小袖昔八丈」は明治6年(1873)6月、中村座初演。黙阿弥は三世春錦亭柳桜の人情噺「白子屋政談」を元に、その登場人物である髪結新三を主人公に描いています。

舞台は深川が中心に描かれ、新三が白子屋の手代・忠七をかどわかす「永代橋」、新三が住む「富吉町(永代1・2丁目)の長屋」、さらに弥太五郎源七と新三が対決する大詰には「法乗院ふんま堂橋」が登場します。また、新三の朝湯帰りの衣裳には深川を代表する料理茶屋であった「平清」の手ぬぐいを縫込んだ粋な浴衣姿、また長屋を訪れる鯉売りから初鯉を買う場面など、深川情緒と江戸市井の季節感を情感豊かに描いています。さらに黙阿弥は明治の生世話物である散切物でも「水天宮利生深川」を明治18年(1885)に手掛け、没落していく武士の姿を主人公に新時代の社会劇として描きました。

このように深川は江戸庶民の生き様を描く、多くの歌舞伎の舞台となりました。江戸の地理や土地ごとの特色に精通していた当時の狂言作者たちは、必然的にその場面にふさわしい舞台として深川を取り上げました。そこに描かれた深川の風景や人々の姿は、現在まで生き生きと歌舞伎の中に息づいています。



(主な参考文献)

河竹繁俊  
『歌舞伎作者の研究』  
(東京堂/1941)  
国立劇場調査養成部  
調査記録課編  
『国立劇場上演資料集  
<592> <601>』  
(日本芸術文化振興会  
/2015)

「梅雨小袖昔八丈」豊原国周画  
明治26年(1893)  
都立中央図書館特別文庫室蔵